

聖書：第一ヨハネ2章18～29節

説教：キリストにとどまる

## 1 終わりの時代

### 1) 世の終わりが来る

18節の最初に、「今は終わりの時です」とあります。ときどき、戦争のうわさや飢饉とか異常気象の話の聞くと、この世界の終わりは近いのだろうかとか漠然とした不安を感じることがあります。しかし、だからと言って私たちの生き方を今日からがらりと変える訳でもありません。不安は感じながらも、昨日と同じ生き方をくり返します。多くの人は先祖からのお墓を大切に守って、次の世代にきちんとわたしていかなければならないと考えています。お墓を守る、位牌を守る。あるいは男の子を産むとか、養子を迎えて家を継がせる、そうやって家系を守るということもそうでしょう。それは世の終わりはない、ということが前提となっている生き方とも言えるでしょう。

では聖書ではどうなのか。あるときイエスは言われました。「この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることはありません。」(マタイ24章35節)

ここに大切なことが二つ述べられています。一つは、この天地は滅びるという事実です。主に会おう前は、世界には終わりが無いということを前提にして生きてきました。しかし、私たちが主に会って救われたとき、大きく変えられました。あまり意識してこなかったかもしれませんが、この世には終わりがあることが前提とした生き方、そんな生き方に変っていたのです。

世の終わりがあるということを聞いて、二

つの極端な反応が出て来ます。一つは、どうせいつか世界が終わるのだというのなら、せいぜい楽しんで生きようじゃないか。ほかの人のことなどどうでも良い。自分だけ楽しまなければ損だ。そういう快楽的な生き方を選ぶ極端があります。もう一つは、これと反対に一生懸命正直に生きたとしてもすべてが消えてなくなるというのなら、生きていることにどんな意味があるのか。もう生きる意味はない。それなら死んだほうがまだ。そういう悲観的な考え方をする極端です。

もし世界が滅びて後に何も残らないというのなら、確かに私たちががんばって生きる意味はほとんどなくなります。極端かもしれないけれど、快楽的な生き方か悲観的な生き方か、二つのうちいずれか一つを選ぶしかないでしょう。

### 2) わたしのことばは決して滅びない

ところがイエスは、そうではない別の道をきちんと語ってくれました。それがイエスの語った二つ目のことになります。「しかし、わたしのことばは決して滅びることはありません」世界は滅びるけれど、わたしのことばは決して滅びない。言い換えればイエスの救いは滅びないということです。世界が滅びたとしても、そのことは私たちのいのちには何の影響もないということです。ですから、世界が滅びてしまうからと言って、極端に快楽的な生き方に走ることもないし、極端に悲観的な考え方をしなくてもよいということになる。

ではどんな生き方を選択するのか。それは28節にあるように、「キリストのうちにとどまって」いることになります。

## 2 終わりの時の戦い

### 1) わたしの名を名のる者が現れる

世界が減びようが、今日何が起ころうが、永遠に減びることのないキリストにとどまりながら淡々と今日の日を生きていく。言うのは簡単ですが、実際はそんな易しいことではないと皆さんはご存じです。世界が減びるというような大げさなことでなくても、目の前に起こる小さなこと、思いがけないことを見たり聞いたりすると、どんなにキリストに信頼しているつもりでも動揺したり、恐れたり、悲しんだりしてしまう。それが私たちの現実です。

動揺するのにはいろいろ理由はあるでしょうが、まったく予想もしていないことが突然起きたとき、動揺してしまうことがあります。もしも前もって教えられているなら、実際に起きたとき少しはびっくりしますが、すぐに心を落ち着けることはできるでしょう。それでイエスは、終わりのときにどんな事が起こるのかを前もって教えて下さいました。

その一つがマタイ24章4,5節にあります。「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現れ、『私こそキリストだ』と言って、多くの人を惑わすでしょう。」

ときどき新興宗教の教祖という方が、「私はキリストの生まれ変わりである」と語っているのを耳にすることがあります。皮肉なことですが、にせ預言者が自分はキリストだと言え言えほど、彼らは聖書のことばが真理

であると証明していることになります。このようにしてにせ預言者が現れる。それが一つ目の前兆です。

### 2) イエス・キリストを否定する偽り者

では二つ目の前兆はなにか。それが19節にあります。「彼らは私たちの中から出てきました。もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし私たちの仲間であったのなら、私たちといっしょにとどまっていたことでしょう。」

皆さんはここを読んで、過去に教会を出て行った人たち、よその教会に移った人たちとか、そんな話を連想したかもしれません。しかしここで言われているのは、あくまでも「偽り者」と言われる人たちです。22節に「偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者」のことだとはっきり書いています。同じ信仰であっても、何かの事情で教会を離れて他の教会に移るということは、現実としてしばしば起こりますが、そのことと、ここで語っていることとはまったく違うことに注意していただきたい。あくまでもここで語っているのは偽り者についてです。

終わりの時が近くなると、偽り者が現れ、私たちが巧みに誘惑してくるのだと言うのです。でも、皆さんはなかなか身近に感じられないかもしれない。この教会は大丈夫だろう。そんなグループに会うことはないだろう、と他人事のように多分思っているでしょう。

札幌に統一教会からの脱退をサポートしたり、また異端の研究などで活動されているパスカルさんがおられます。この方から最近こんな話を聞きました。「あるカルトグループが日本に入り込んできています。彼らは、自

分たちの姿を隠して教会に入り込み、時間をかけて信頼を得て中には役員クラスになる者もいる。そうしてからある日突然自分たちの正体を現し、教会をひっくり返す。そういうカルトがいま大きな問題になっている。札幌にも来るでしょう」と言っておりました。決して他人事ではないのです。異端の嵐が吹き、ときにはカルトの攻撃を受けることがあっても、キリストにとどまり続ける必要があります。

### 3) キリストにとどまる

どのようにしてとどまるのでしょうか。私はすぐにだまされるかもしれないと不安に感じたでしょうか。27 節前半にこうあります。「あなたがたの場合は、キリストから受けたそそぎの油があなたがたのうちにとどまっています。それで、だれからも教えを受ける必要がありません。」

「キリストから受けたそそぎの油」とは何か。ヨハネの福音書 15 章 26 節のみことばがよく説明しています。「わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかします。」そそぎの油とは、キリストが遣わしてくださった真理の御霊のことを指します。私たちは、その真理の御霊をいただいでいて、御霊がキリストについて私たちを教えてくださいるので、大丈夫。たとえ反キリストやにせ預言者が、「これこそ新しい発見である」「あなたがたが知らなかった新しい教えがあります」「〇〇先生が新しい預言を語ります」とか言って、あなたを誘惑したとしても、驚くことはない。あなたがたは初めからすでに聞いている。それで十分なので、あわれる必要はない。そこにとどまり

なさい、と勧めます。

3 その来臨のときに、御前で恥じ入ることのないために

なぜキリストにとどまるのでしょうか。改めてこんな質問をされるととまどうかもしれません。この方に救われたのだからとどまるのです、と多くの方は答えるでしょう。そのとおりです。しかし今日の箇所を見ると、もっと切実な理由があるようです。

28 節の後半。「それは、キリストが現れるとき、私たちが信頼を持ち、その来臨のときに、御前で恥じ入ることのないためです。」

世の終わりの時に主が来臨すると言われます。その時私たちはこの方をどのようにして迎えるのでしょうか。この方が来られるなんて聞いていなかった、というのなら迎える準備をしていなくても、何とでも言い訳ができるでしょう。しかし、私たちは聖書から主イエス・キリストは再び来られると聞いてしまったのですから、言い訳はできません。日々キリストにとどまって迎えるための備えをしておかなければなりません。いったいどんな準備するのか。

ふつう、家にお客さんが来られるとき、部屋をかたづけ、掃除をして、お菓子とお茶を用意して迎えます。ではイエス・キリストの場合はどうか。なにしろいつ来るのかわかりません。今日かもしれないし、千年後かもしれない。いつ来ても大丈夫なように、毎日緊張して待っている。自分の性格を考えたらとてもできそうにありません。すぐにさぼったりしそうです。だいたい緊張して待つなどという事は苦手です。いつも言うようですが、主は私たちに重荷を負わせるような方ではありません。結局私たちがすることはただ一

つです。1章9節にあるとおりです。「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」

「私は主を迎えるような資格がない罪人です。」 そのように告白することがキリストにとどまることであり、そのような者にこそ、主は喜んで来てくださいます。